第１０回 座頭市五番勝負～映画編

盲目にして居合いの達人、座頭市。

勝新太郎の生涯の代表作となったこのキャラクターは、１９６２年に大映で製作された第一作『座頭市物語』以来、劇場版２５作、テレビ版全１００話が作られてきた。今回は、その中から特に印象的な映画を５本ピックアップし、その魅力を掘り下げていきたい。

①『座頭市物語』（映画／１９６２年・大映／監督：三隅研次／脚本：犬塚稔／出演：勝新太郎、天知茂、万里昌代、柳永二郎）

後の印象としては「無敵のヒーロー」というイメージの大きい座頭市だが、初期作品ではそうでもない。ヒロイックな活躍よりむしろ、座頭市を中心とした日蔭者たちの物哀しい人間ドラマに主眼が置かれている。

この第一作では座頭市の殺陣は物語を半分過ぎるまで登場せず、しかもこの時はわずか二人しか斬っていない。そして、そこからもラストの決闘まで仕込み杖は決して抜かない。

物語は、座頭市と二人の人間との触れ合いを軸に展開する。

まずは小料理屋の女・おたね（万里昌代）。復縁を言い寄ってくるヤクザから身を守ってくれたことで、おたねは座頭市に惹かれる。印象深いのは中盤のシーンだ。満月の夜、並んで歩く二人。「おたねさん、綺麗な人なんだろうな。顔が見たくなった」と呟く座頭市に対し、おたねは「私はこんな顔です。さわってみてください」と座頭市の手を導いて自分の顔を触らせる。月明かりに照らされる二人の姿は幻想的で、座頭市に訪れた温かい心の安らぎが伝わってくる。

そして、もう一人は平手造酒（天知茂）。肺を病んで「いずれは病み果てて、この寺の土にでもなって終わることだろう」と人生を諦めている平手と座頭市は「天涯孤独の身の上」同士という境遇も重なって意気投合。小鳥のさえずる静かな池の畔で釣り糸を垂らしながら、友情を育んでいく。病のため全身を枯れさせながらも、目だけは剣豪らしく鋭く光る天知茂の芝居には鬼気迫るものがあり、平手の儚い生涯が切なく映し出されている。

だが、二つの一家が対立する中、異なる一家に草鞋を脱いでいる二人は、いずれ闘う宿命にあった。乱闘の中、対峙する座頭市と平手。座頭市の居合いが平手を斬る。「つまらん奴の手にかかるより、貴公に斬られたかった」そう言って息絶える平手。その亡骸を抱きしめ、座頭市は涙する。その姿は、性別や立場を超えた哀しいラブシーンのようでもあった。

戦いとは勇壮なものではなく、空しいもの――そんな想いの伝わってくる決闘だった。

②『座頭市千両首』（映画／１９６４年・大映／監督：池広一夫／脚本：浅井昭三郎、太田昭和／出演：勝新太郎、坪内ミキ子、城健三朗、島田正吾）

「座頭市」シリーズは追うごとに人気を増し、やがて大映の看板シリーズになっていく。それにつれて勝は人気面で雷蔵を凌ぐトップスターになり、大映も「座頭市」シリーズには確実な観客動員を期待するようになっていた。それに伴い、作品の内容も変化する。この時期の作品は第１作目と打って変わって、サービス精神に満ちた純然な娯楽作品として楽しく仕上がっているのだ。特に、座頭市の毎回魅せるユニークな居合いヤクザたちとの大立ち回り、ゲストで出演する用心棒との一騎打ちは人気を博している。

中でもシリーズ第６作目にあたり本作は、シリーズ屈指ともいえるスケールの大きなアクション巨編に仕上がっている。

冒頭のタイトルバックから座頭市は早くも三度の立ち回りを見せつけ、これからの展開への期待を高める。そして、シリーズ初登板となった池広一夫は西部劇調の時代劇を目指して、スタイリッシュな映像で座頭市の世界を切り取ろうとしていた。

圧巻は、敵役として登場する勝の実兄・若山富三郎（当時・城健三朗）だ。

若山の扮する浪人・十四郎の武器はムチだ。そのため、座頭市の居合いの間合いに入ることなく遠隔攻撃ができる。座頭市はいかにこれを倒すのか。それもまた、本作の大きなテーマになっていた。

ラストには壮絶な決闘が用意されている。

事件は全て解決し、残るは両雄が雌雄を決するのみ。荒野で待ち受ける座頭市。砂塵の向こうから聞こえてくる馬蹄の音。馬上には十四郎がいた。馬上からムチで攻撃してくる十四郎に対し、座頭市は成す術がない。挙句に首をムチで縛りつけられて、そのまま馬に地面を引きずられてしまうのだ。

これは、若山自身のアイディアだった。勝もまた喜んで受け入れ、スタントなしでこれを演じている。そして、胸に鉄板を入れて体を防護しながら、砂埃の舞う荒野をはいずりまわった。一方、対する若山も負けてはいない。頭から地面に落ちるも、カットを割らずにそのまま立ち上がり、座頭市と壮絶な殺陣を展開している。

③『座頭市血煙り街道』（映画／１９６７年・大映／監督：三隅研次／脚本：笠原良三／出演：勝新太郎、近衛十四郎、高田美和、小沢栄太郎）

勝新太郎は殺陣に対し、人一倍のこだわりを持っており、面白い戦いを表現するためならいくらでも体を張った。そんな勝がどうしても戦いたかった男がいた。それが、当代随一の剣豪役者と言われる近衛十四郎だった。攻守のいずれの局面でも迫力を醸し出す殺陣の技量は、勝をはじめ時代劇関係者の敬意を集めていた。近衛もまた、勝＝座頭市との戦いを望んだ。

そして、このシリーズ１７作目で合いまみえることに。両者は撮影現場でまるで恋人同士のように顔を突き合わせながら、殺陣の段取りをつけていく。

本作の近衛はたまにしか登場しない。途中途中に登場して座頭市と言葉を交わすだけ。来るべき対決へ逸る観客の気持ちを焦らす演出だ。

物語中盤になって、ようやく近衛は刀を抜く。が、これも暗闇の中から突然現れて悪代官の手下を一刀の下に切り伏せるだけ。あまりの早業でその剣の動きは見えず、また座頭市に対して「お前に関わりないことだ」と釘を刺すその顔は鬼の形相である。この男に対して戦慄を覚えさす描写により、期待は益々高まる。次のシーンで近衛の正体が明かされる。「悪事を闇に葬るためにその関係者を殺す」公儀隠密である。これで座頭市との対立の構図がハッキリした。座頭市の守る少年の父親が、まさに近衛の殺すべき「関係者」なのである。

あとは対決へ向けて一直線だ。物語の終盤、座頭市はさらわれた少年を救うためヤクザの所へ殴りこむ。切り通しと屋敷での二度の大立ち回りの大サービスだ。が、いつもならクライマックスに持ってきてもおかしくないこのシークエンスは、ここではただの前菜。メインへ向けての助走に過ぎない。

その後、少年との悲しい別れがありドラマとしての一通りの完結を見ると、突然、雪が降り始める。そして座頭市の前に近衛が立ちはだかる。まるで特典映像のような特別扱いで、この映画のメインデッシュは幕を開ける。が、そこから対決が始まるまで、また芝居が一つ二つ入るのである。とにかく三隅演出は焦らしに焦らす。「お前を斬る！」修羅の如き凄まじい形相の近衛。対する座頭市も譲らない。座頭市もまた覚悟を決めた表情に。

そして対決が始まる。

舌舐めずりして柄に手をやる近衛。座頭市も低く居合いに構える。同時に刀を抜く両者。一瞬のうちに一合、また一合。体を入れ替えてもう一合。近衛の振り下ろす刀を座頭市はギリギリでかわす。すかさず態勢を整えて今度は座頭市が斬りかかる。近衛はそれを難なく払いのける。「舌舐めずり～」からここまで、なんとわずか５秒の出来事。その後も凄まじい互角の斬り合いが続くが、やがて座頭市が劣勢に。切っ先を座頭市に向けて迫る近衛。表情に恐怖感を浮かべながら後ずさる。こんな座頭市、後にも先にも見たことがない。雄叫びをあげて斬りかかる近衛を座頭市は辛うじてかわすが、態勢を崩して地面に倒れこんでしまう。そこに刀を振り上げる近衛。が、座頭市はギリギリの所で近衛の腹に刃を突き刺す。それでも動じない近衛。両者向き合ってまた二合三合……、果てしなく続くと思われた対決は思わぬ邪魔者により終わりを告げる。「市、ワシの負けだ」と言って去っていく近衛。それを静かに見送る座頭市……。

と書いているが普通に見たのでは二人の動きが早すぎて目が追いつかない。繰り広げられた両者の対決は、スローとポーズを繰り返すことで、ようやく詳しい動きを把握することが出来る。

高度な殺陣の技術がコンマ何秒単位で応酬する、凄まじいばかりの斬り合いだった。

④『座頭市御用旅』（映画／１９７２年・東宝／監督：森一生／脚本：直居欽哉／出演：勝

新太郎、森繁久彌、大谷直子、三國連太郎）

1960 年代、日本映画界はジリ貧状態にあった。石原裕次郎は日活を、三船敏郎は東宝を、中村錦之助は東映を、と各社のスターたちは相次いで独立して、自らの力でそうした状況を打破しようとする。そのころ、「座頭市」「悪名」「兵隊やくざ」と人気シリーズのローテーションをこなしていくだけの日々に嫌気がさしていた勝は、彼らの活躍に刺激される。そして、大映の永田雅一社長に掛け合い、「社内プロ」という形で独立を認めさせる。それが「勝プロダクション」だった。

「採算を考えるなら会社を作った意味がない」

それが社長・勝新太郎の口癖だった。全ては映画のため。その旺盛な製作意欲にスタッフたちも燃える。50 年代には海外の映画祭でグランプリを欲しいままにしていた大映京都のスタッフたちもまた、予算やスケジュールの厳しい管理に苦しめられていた。それだけに、そうした枷を外して思う存分に腕を発揮できる勝との現場は何より有難いものだった。

勝プロダクションの旗の下、勝と仲間たちは従来の常識に挑戦するような映画製作をしていった。

一方、60 年代後半から経営危機に陥っていた大映は、７０年代初頭には倒産へのカウントダウンが始まり、京都撮影所では激しい組合闘争が繰り広げられた。シリーズ第２３作目に当たる本作は、そうした状況下の大映京都で勝プロによって製作される。そのため、大映の経営状態と関係なく森繁久彌、三国連太郎をゲストに迎えての大作にすることができた。この時、勝は大映倒産後に東宝で本作を配給する契約を結んでいたのだ。

既に東宝での公開を見越していたからだろうか、本作で勝は森田富士郎カメラマンらスタッフに、「よりリアルな画面構成」「より残酷な表現」といった現代的センスの映像を求めている。森田や照明の中岡源権はこれに応え、色彩的な美麗さやケレン味を極端にまで抑えた薄暗いドキュメントタッチの映像で全編を構成。三国連太郎、石橋蓮司、蟹江敬三ら最強最悪の悪の軍団にひたすら責められる座頭市をそうした映像の中に置くことで、座頭市の苦痛を生々しく伝えてみせた。

これまでの陰影の濃い映像からは、どこか現実離れしたファンタジックな印象があった。が、本作は、薄暗さ故に生まれる画面のザラつきのせいで、ドキュメントタッチの殺伐とした雰囲気が醸し出されているのだ。そのため、容赦なく展開される悪党一味の暴虐ぶりが、より冷たく不気味なものとして突き刺さってきた。

それだけに、終盤の座頭市の逆襲もまた、より激しく恐ろしいものとして浮かび上がってくる。

襲いかかる座頭市に対し、鉄五郎は油をまいて焼き殺そうとする。火が座頭市の体に燃え広がるのを見て、勝ち誇った笑みを浮かべる鉄五郎。だが、その表情は一瞬にして引きつる。怒りの修羅と化した座頭市には、いかなる攻撃も通用しなかったのだ。燃え盛る炎をバックに、自らの体も実際に燃やしながら迫り来る座頭市の姿は、まるでホラー映画の

怪物。鉄五郎は恐怖のあまり、腰を抜かしてしまう。そんな鉄五郎を、座頭市は容赦なく斬り捨てる。

悪役はどこまでも悪く、主人公はどこまでも強い。そして名優たちが魅せる、激しい攻守逆転劇の果てのカタルシス。これこそがエンターテイメントだという真髄を見せつけた作品である。

⑤『新座頭市物語・折れた杖』（映画／１９７２年・東宝／監督：勝新太郎／脚本：犬塚稔／出演：勝新太郎、太地喜和子、吉沢京子、大滝秀治）

71 年の大映倒産後、勝プロは東宝と提携して映画製作を続行することになる。年３番組×２本立て＝計６本の契約が結ばれ、直接製作費を製作前に東宝が無利子で保証するという好条件も加わった。これにより、映画が当たっても外れても勝プロは赤字にならないという、経営の余裕が生まれた。そして 72 年のゴールデンウィーク、お盆、年末の興行ではいずれも、実兄・若山富三郎主演の『子連れ狼』シリーズに勝主演作を併せた「勝プロ二本立て」が大ヒット。この年の年間配収ベスト 10 に勝プロ作品が４本もランクインしてしまう。

そして勝は考えた。座頭市を自分の手で演出するのは興行が好調な今よりおいて他にない。今なら思い描いていた実験的な映画を撮ることができる―こうして作られたのが、勝自身が初めて「座頭市」を演出する『新座頭市物語　折れた杖』だった。タイトルに本作から「新」がつくのは、新たに東宝で配給するにあたり、それまでの「ヒロイックな座頭市」から第一作の頃のような「孤独な座頭市」へと原点回帰を図る勝の決意があった。

舞台となる漁師町は、丹後半島の間人（たいざ）海岸に大掛かりなオープンセットを建設して撮影された。が、ロケ直前に台風が直撃。漁師町は跡形もなく破壊されてしまう。ここで普通なら予算やスケジュールの都合を考えて、撮影所内か京都近郊に小規模にセットを建て直すところ。が、勝は違った。予算度外視で、巨大なオープンを再び間人に建ててしまう。それほどまでに、勝は本作に入れ込んでいた。

そして、シリーズ前作『座頭市御用旅』で勝が森田富士郎（撮影）、中岡源権（照明）と作り上げてきた不気味な現実感あふれる映像が、本作で爆発する。前作はベテラン森一生監督が最終的には手際よくまとめたため、それなりに収まりのつく作品になった。が、今度は「映画文法なんて誰が決めたんだ！」と、常識に果敢に挑戦することに意欲を燃やす勝自身が監督。そのイマジネーションは止まることがない。

狙いは「座頭市の脳内のイメージ化」。座頭市は目が見えなくとも、その頭の中には何らかの具体的な映像イメージが浮かんでいるのではないか。勝は、常々そう考えていた。それがどんなものか、映像で試してみようというのである。その結果、映し出されたのは座頭市の頭に巣食う「悪夢」の世界だった。

それは静かに淡々と紡がれる地獄絵図―照明は劇的に強調されることなく、いつも薄暗

い。カメラはズームと手持ちを多用しながら、激しく揺れ動き不安定で、観ていて酔いそうになってくる。そして、画面は。隅々まで何らかの情報で埋め尽くされ、息のつける空間が全くない。どこにも逃げ場はなく、ひたすら無間の地獄巡りが続く。

老婆が吊橋から突然落ちて死ぬ冒頭に始まり、ヤクザたちに強制的に射精させられる知的障害の少年、ヤクザに頭を叩き割られて弟を殺された哀しみのあまりに海へ身を沈める女郎、万五郎に掌を潰され苦悶する座頭市、その血だまりに逆さに映り込む万五郎の微笑……。死臭だけが支配する地獄絵図が、ひたすら淡々と展開する。

「座頭市はその見えない目で何を見つめているのか」この時、勝はその心相のさらなる深淵を追い求めようとしていたのだ。

スターに昇りつめるキッカケとなり、その人気を不動のものとし、理想に挑み、そして表現者として開花していく――。「座頭市」シリーズの変遷には、映画人としての勝新太郎の成長と苦悩の軌跡がそのままに刻み込まれている。

【DVD 情報】

■『座頭市物語』角川書店
■『座頭市千両首』角川書店
■『座頭市血煙り街道』角川書店
■『座頭市御用旅』東宝
■『新座頭市物語　折れた杖』東宝